

❖ 南方熊楠の心霊研究と身心変容体験 ❖
— 那智隠栖期を中心に —

龍谷大学世界仏教文化研究センター 博士研究員 唐澤太輔 (Taisuke Karasawa)

◆ 近代科学とオカルティズム

オカルチズムごとき腐ったもの (1894 年 3 月 3 日付土宜法龍宛書簡) [全集 7 : 218]

< 科学と心霊 >

- 1890 年代、当時世界屈指の学問都市であったロンドンでは、オカルティズムが全盛期であった。
⇒ オカルティズムは、近代科学の勃興期、その在り方に疑問を感じ、他の「何か」を信じたい人々のための一種の避難地(アジール)であった。
- 1882 年、フレデリック・マイヤーズらケンブリッジ大学の知識人たちによって SPR (英国心霊現象研究協会) が発足。
- SPR には、ケンブリッジの優秀な知識人が集まった。SPR においては、自動発話、人間同士の テレパシー 交信の可能性を知ることこそが、心の仕組みについて何かを解明すると考えられ、集中的な研究課題とされていた。
- 一方その頃熊楠は、ロンドンのハイドパークで連日のように行われていた無神論者の演説をしばしば傍聴していた。
⇒ 熊楠は、この頃、近代科学にかなり傾倒していた。
- 真言僧・土宜法龍 (どぎ・ほうりゅう、1855~1923 年) から熊楠へ、SPR 調査依頼があったが……

またウエスト・ミンスター寺の内に「ソサイチー・ホール・サイキカル・リゾールチー」というものありて、しきりに幽霊等のことを取り調べおり候由。… (中略) …御取り調べ下さらずや、願ひ上げ候。(日付不明、南方熊楠宛書簡) [往復書簡 : 8]

- 熊楠は、この依頼を受け流している。
- 結局、熊楠がオカルティズムに本格的に関心を持ったのは、帰国後、那智に隠栖したとき (1901 年 9 月~1904 年 10 月) からであった。
- その背景には……
⇒ マイヤーズ による大著『ヒューマン・パーソナリティー』 (*Human Personality and Its Survival Bodily Death*, 1903)
⇒ 那智山における身心変容体験

◆ Human personality and Its Survival of Bodily Death

< 概要 >

• 『ヒューマン・パーソナリティー』は マイヤーズ の遺稿をもとに編纂された。構成は、
< vol,1 >

I. INTRODUCTION (序論)

II. DISINTEGRATION OF PERSONALITY (人格の分裂)

III. GENIUS 3 章 (天才)

IV. SLEEP (睡眠)

V. HYPNOTISM (催眠術)

VI. SENSORY AUTOMATISM (知覚の自動作用)

< vol,2 >

VII. PHANTASMS OF THE DEAD (死者の幻影)

VIII. MOTOR AUTOMATISM (筋肉上の自動作用)

IX. TRANCE, POSSESSION, AND ECSTASY (トランス・憑依・エクスタシー)

X. EPILOGUE (結語)

- この著作は当時、大学において心理学の教科書としても用いられていたという [三浦 : 124]。
- 熊楠は、那智山に孤居していた頃、正確には 1904 年 2 月 12 日に、この書を取り寄せている。
- 届くや否や、熊楠はこの大著を読みふけている。そして、およそ 2 ヶ月かけて読破した。
- 「夜臥内にて Myers よむ。」
- 熊楠は、HP の和訳・刊行さえ構想していた。

- 「抄訳し、それに小生の注を付し、最後に小生の論を付し……」（1904 年 3 月 24 日付土宜法龍宛書簡）[往復書簡：402-403]
- 結局、実現されず。
- 熊楠は、この書を「**近来希なる著作** [南方(紹介・武内)：69]」とまで評価しており、彼に与えたであろうその影響力の大きさがうかがわれる。

◆ 那智へ

<帰国>

- 1900 年 10 月、熊楠は遊学先のロンドンから帰国。
 - ⇒ 経済的理由などによる無念の帰国（「蚊帳のごとき洋服一枚」）。
 - ⇒ 親族からの冷たい目。
 - ⇒ 父が残した遺産分配をめぐる話し合い。
- 熊楠の、地位や名誉などに全くこだわらない生き方は、「常人」には理解し難いものであった。
- 1901 年 10 月、熊楠は南方酒造の勝浦支店を頼りに、紀伊半島南部の勝浦町へ向かう。
- 翌年 1 月から、那智山・大門坂参詣道入口のすぐ近くにある**大阪屋**という旅館を常宿にすることになる。
- 熊楠は、まるで引き寄せられるかのように、那智山へやって来た。

◆ 体外離脱

1904 年 3 月 10 日 朝晴、午後雨 蛙連声して鳴はじむ

うつゝにて(幻想といふこと知りながら)黒き紐ある人形如きものとなり、電動のアンダーグラウンド鉄道の乗り路如き所を進み又却退し(進退とも頭は同一方に向ひ)又下におりる一所、家の外に一男一女(日本人)あるを見るをわざと見ず、人形如きものに自分の意志集る。注意点と見ゆ。[日記 2：413]

1904 年 4 月 25 日 雨、夜大雨風

夜大風雨、予、灯を消して後魂遊す。此前もありしが、壁を透らず、ふすま、障子等開き得る所を通る故に迂廻なり。枕本のふすまのあなた辺迄引返し逡巡中、急に自分の頭と覚き所へひき入る。恰も vorticella が螺旋状に延し後急に驚きひき縮る如し。飛頭蛮のこと多少かゝることより出しならん。[日記 2：431]

又魂遊といふことあり、予も今春已に之をなせり。糸にて自己の頭をつなぎ、俗にいふろくろくび如くに、室の外に遊び、其現状を見るなり。此事亦寒甚き山中等にて、かゝるものゝ説を聞合すに、みな同一なり。(1904 年 6 月 21 日土宜法龍宛書簡)[南方(紹介・武内)：66]

七年前嚴冬に、予、那智山に孤居し、空腹で臥したるに、終夜自分の頭抜け出で家の横側なる牛部屋の辺を飛び廻り、ありありと闇夜中にその状況をくわしく視る。みずからその精神変態にあるを知るといえども、繰り返し繰り返しかくのごとくなるを禁じえざりし。その後 Frederic W. H. Myers, 'Human Personality,' 1903, vol. ii, pp. 193, 322 を読んで、世にかかる例尠なからぬを知れり。(1911 年 8 月「睡眠中に靈魂抜け出づとの迷信(1)」『人類学雑誌』27 卷 5 号)[全集 2：260]

◆ ヒューマン・パーソナリティーの記述から

HP vol. 2 CAPTER IX. TRANCE, POSSESSION, ECSTASY, p.193

我々が次に説明する話題は「眠り」についてであった。…(中略)…我々のもっている証言は、時に明らかに普通の眠りの間、魂は肉体から出回るのではないか、そして多少混乱しつつもこの千里眼的体外離脱において見たことの記憶を持ち帰っているのではないか、ということを示すと思われる。これは、起きている間にも、突発的なものとして、確かに起こり得るものである。しかし、通常の眠りは、このプロセスを助けるようである。そして、(自発的あるいは誘導的な)より深い眠りは、さらにそれを助長するようである。死に先立つ昏睡において、あるいは時に死と見なされる「仮死状態」において、この魂の出回りの能力〔=体外離脱〕は、その頂点に達するようである。

<離魂>

- マイヤーズは、ここで、深い眠りあるいは昏睡状態、仮死状態などにおいて、「離魂」あるいは「体外離脱」が起こり得ると述べている。

- また、時に体外離脱し徘徊して見た際の光景を記憶したまま覚醒することもあると述べている(千里眼的体外離脱 clairvoyant excursion)。

HP vol. 2 APPENDICES, TO CHAPTER VII, p.322

ちょうど引用されたものと多くの点で類似したケースは、S.P.R.紀要 8 号の 194 頁にあげられた、L.バートランド師のものである。ティトリス山の危険な登山の間に、バートランド氏は、彼の仲間たちとはぐれてしまった。そして休むために座り、寒さのために麻痺していた。しかし、彼の頭は、クリアなままで、ウィルツ博士によって説明された、体外離脱と「伸縮自在のひものようなもの」によってくっつけられている感覚を経験したのである。この状態の間、彼は、はぐれた仲間たちに関する千里眼的印象をもち、彼らに戻ってきた際に、彼らが行っていたことを述べることによって非常に驚かせた。

- 伸縮自在のひものようなもの (a kind of elastic string) とは、熊楠の経験した「黒い紐」と酷似している。
- このような山の中での孤独感は、いわゆる「孤立性幻覚状態」を助長させる。
- また、「深夜にいたれば、そのうえに感覚遮断が加わるので、健康な人間でも幻覚準備状態におちいる」[近藤：146]こともあるという。

◆ 側頭葉てんかん

- 熊楠は肉体的には、その生涯において特に大きな病気にも罹らず「健康な人間」だったようだが、精神的にも「健康な人間」だったかという、そこには疑問符が打たれる。
- 熊楠の脳髄は、現在、大阪大学医学部に保存されている。
- 脳の重さは 1425 グラム(成人の平均 1300~1400 グラムより少し重い程度)。
- 脳溝は非常に深く刻まれていた。
- 熊楠の行動の特徴
 - ① 爆発性(攻撃性)：大英博物館内での暴力事件
 - ② 粘着性：研究における執拗なまでのこだわり。全てを集めたい。いつまでも粘菌を観察していたい。
 - ③ 過剰書字：書簡においても日記においても、紙幅いっぱい、独特のくさび形文字を書き尽くす。
 ⇒ ゲシュヴィント症候群か？
- 近年の研究によって、熊楠が、側頭葉てんかんであったことが明らかにされている。保存脳の解析・てんかん症候学の第一人者である扇谷明(せんごく・あきら・せんごくクリニック院長)が、3 次元 MRI を用いて熊楠の脳髄を詳細に検査したところ、右海馬の萎縮が見られた(*Neurology* ; 50 : 1373-1376, 1998)。
- 側頭葉てんかんと「体外離脱(Out-of-Body-Experience, OBE)」に深い関係がある。
- *Nature* 2002 年 9 月 19 日号に興味深い記事が掲載された。
- ‘Stimulating illusory own-body perceptions : The part of the brain that can induce out-of-body experiences has been located.’
- 右側頭葉てんかんの患者(43 歳女性)に対して、大脳皮質の右側に電気刺激を与えたところ、体外離脱感覚が生じた。
 1. 2~3mA で刺激したところ、患者にはまず「ベッドに沈んでいく」あるいは「高いところから落ちている」という感覚が生じた。
 2. 刺激を 3.5mA に上げると、患者は、「上から、ベッドに自分が横たわっているのが見える。しかし、両足と下半身しか見えない」と答えた。
 - 「両足と下半身しか見えない」
 - 熊楠は、1904 年に自分の首が抜け出るという経験を 2 回している。
 - 自分の首が抜け出ているのだから、当然、横たわっている自分の頭は見えない。
 - もしかしたら、熊楠はこのとき、自身の「両足と下半身」しか見えていなかったのかもしれない。
 - 熊楠は 18 歳：自身のてんかん発作について初めて記述。
 - その後、意識を失う「大発作」も経験している。
 - 彼が 30 代に入ってから、このような明らかな発作は見られなくなる。
 - 「複雑部分発作」や、意識減損に至らない「てんかん性前兆」(単純部分発作などとも言われる)に関するような記載も、いくつか見受けられる。
- 1885 年 12 月 29 日、熊楠落第。
- 1886 年 1 月 17 日、「頭痛、殆ど困瞞す」
- 同年 2 月 5 日、てんかん発症。

1886年2月5日

昨日小川昌八郎教室にて癲癇起こる。井上十吉、為に授業を廃すること半時間と云。〔日記1:61〕

- 1888年11月25日、繁太郎が死去。熊楠が知ったのは1889年1月7日。

1889年4月24日 陰

昨朝亡羽山繁次(ママ〔太〕)郎を夢み、予、君死たるはうそなりやと問ふに答へず。今朝羽山蕃次郎子を夢む。今夜を徹していねず。〔日記1:202〕

- 3日後(4月27日)にてんかん発症。

1889年4月27日

夜癲癇発症。十九年十月以降初めてなり。初め高野、大坪氏室に入り、後に三好、中川氏室に入る。世良、堀尾等居合わせる諸氏鎮撫さる。十二時過、三好、中川二氏に送られ帰宅。〔日記1:203〕

1886(明治19)年10月23日

本日病気に付、会を延引す。〔日記1:92〕

◆ プロムネシアとエントプティック

<既視体験>

- 「てんかん性前兆」においては「既視体験 (déjà-vu デジャ・ビュ)」や、以前にあったと感じるだけではなく、すぐ次に起こることがわかると感じる「予知的感覚」が見られることがある。
- 熊楠自身は、このような現象を、**promnesia**(プロムネシア)という専門用語で記述している。
- 熊楠が、初めて **promnesia** という言葉を用いるのは、1904年3月24日付土宜法龍宛書簡内。
- この頃、熊楠は **HP** を毎夜のように読んでいた。

今始めて貴下より承ることも…(中略)…承りおわりてこんなことはどこかで聞いたことがあると思うなり。これは**プロムネシア (promnesia 前知謬)**と申し、今始めて知ることを以前から知っておったことと間違える一種の**謬病**なり。小生などには多し。(1904年3月24日付土宜法龍宛書簡)[全集7:461]

HP vol.1 GLOSSARY p.xx

プロムネシア

たった今、初めて起こっている場面を回想するという奇異な感覚。つまり「**デジャ・ビュ**」の感覚。「**パラムネシア**(記憶違い)」という言葉は、この感覚に賦与されるもので、誤った記憶のすべての形をカバーすべきであり、そして混乱なしに特にこの一異常感覚を表現するために使うことはできないと思われる。

- 濱中淑彦(はまなか・としひこ)：1884年以降の文献における、いわゆるデジャ・ビュを意味する20以上の用語を調べた結果、**プロムネシア**という語を用いているのは、**マイヤーズのみであった**という。[濱中:368-369]
- ⇒ つまり、熊楠は、この語をマイヤーズの **HP** から知った。

……心理学にいわゆる**プロムネシア**とて、何人も多少、今初めて聞きたることをこれに似たることと混じて、おのれ以前より知りおりたるごとく想う傾きあり。予自身ごとき、四十歳を超えてより**この病**おびただしく、よって毎事自記手筆し置かざることは、たとい従来知り切ったることといえども憑むべき証拠とせぬ定めなり。(未発表手稿「古谷氏の謝意に答え三たび火斎珠について述ぶ(上)」)[全集6:472]

プロムネシアとて、今始めて見聞することを、世には似たことの多きより、かつすでに自分が知っていたように思う、一種の**錯誤**等多ければ、**事の起こらぬうちに 夢なり靈感なり確かに筆記し置かずして、事起こりし後の吹聴のみでは、研究すべき価値なからん**。(1911年6月10日～18日「千里眼」『和歌山新報』) [全集6:12]

<内部視覚>

- てんかん患者には、既視体験以外にも、例えば「**視覚発作**」が見られることがある。
- ⇒ 熊楠による、次に示すような、**光が見えるという体験**は、彼がてんかん性の視覚発作を起こしていた可能性を指摘できるものである。

1904 年 3 月 21 日 快 寒風 春分

此暁予眼さむること二度、ふとんかぶりあるに眼の前明るし。それにあるものを見るに見えず、又ふとんのしわ等のかげもなし。明きこと水銀の如し。[日記 2 : 417]

- 「内部視覚(エントプティック)」
- 光の射さない暗闇にいと「視神経がみずから励起状態に入って、あたかも目の中から光が外に放出されてくるかのような、あざやかな光の体験がもたらされる」[中沢 : 183]

小生眼わるく、左の眼に蝙蝠ごとき黒き翳点を生じ、久しく書を見ることならず。やや久しく見ると、水銀を斜めに注下するとき幻像を生じ、電光ごとく閃くなり。故にこれだけ申し上げおき候。(1938 年 6 月 23 日付岩田準一宛書簡)[全集 9 : 299]

<閃輝暗点>

- 「閃輝暗点」
- 突然視界の中心辺りにチカチカと輝く光や稲妻のような光が現れ、目の前が見えづらくなる現象。
- 熊楠：「左の眼に…」と記述。
- 左目の機能は、右脳が掌っている。
- 熊楠の脳：右海馬の萎縮の所見。

さる昭和三年十二月三十一日夜、予、日高郡妹尾にあつて、大雨中に十八町ばかり山中を歩むうち、深谷に臨んだ道側の雑木が、たちまちことごとく満開せる梅林と化け、一天微雲だになく月さえ渡った。しばらく歩を駐めて観れば、依然として大雨中にあり。歩み出すとまた月夜の梅林が現じた。(1935 年 1 月「蓮の花開く音を聴くこと」『ドルメン 4 卷 1 号』)[全集 5 : 100]

古人はアレキサンドル王が、…(中略)…極端なる二面を兼ねた人と評せしが、小生も左様で、一方に常に世を厭い笑うたことすら稀なると同時に、happy disposition が絶えず潜みおり、毎度人を笑わすこと多し。(1925 年 1 月 31 日付矢吹義夫宛書簡「履歴書」)[全集 7 : 35]

<交錯する事柄>

- 至福(月夜の梅林)と絶望(極寒の中の大雨)
- 厭世感と世俗的高揚感(happy disposition)
- 男性性と女性性
- 狂気と冷静さ

◆ 知未来(予知)

1904 年 3 月 31 日

Myers, II, sec 878, precognition は今のサイエンスには分らず。諸事一切一同における。人の精神は順を追ねば分らずとすれば、此理は分る也。[日記 2 : 421]

HP vol.2 CHAPTER VIII, MOTOR AUTOMATISM, p.185

……魂の独立存在の仮説が…(中略)…我々はまた、まだ科学に知られていない事実としての一形態の予知能力(a precognitive capacity)は、我々が行う説明を助けるであろうことを指摘しておく。

HP vol.1 GLOSSARY p.xx

プレコグニション

超常的に得られる間近に迫った出来事に関する知。

- precognition とは、いわゆる「予知」のことである。ちなみに熊楠は、これを「知未来」と訳している(1904 年 6 月 21 日付土宜法龍宛書簡)[南方 : 68]。
⇒ 実は熊楠は、自身にこの「知未来」=予知能力あるいは神通力があることを明らかに感じていた。

拝復 二十四日出御はがきは二十六日朝九時拝見、多用の為め只今御受け申上候。御依頼の件は熊公神通力を発揮し予知のこととて、丁度二十五日の夜一短文を認め(一寸法師といふ題)、二十六日早朝(御はがき拝受より三時間ほど前に)柴田泰助氏迄差出しおき候間御掲載を乞ふなり。(1926 年 4 月 28 日付三田村玄龍宛書簡)[南方・三田村 : 205]

黒井という人は偏狭な人にて女ぎらいの由、そのことを三村氏より申し来たらぬうちに小生神通力にてこれを知り、岩田梅や北条氏輝の妻の咄^{はなし}その他、女のことづくめに致し申し候。(1926年11月9日付上松菴宛書簡) [別巻1: 131]

——先生はたいへん神秘的なところもおありだったようですが、何かお話になられたことはございませんか。

文枝：自分が祈っておると、それがちょうどそのとおりになるとか言っていました、そのときは険しい顔をしていました。顔の変る人で、すごい表情になるときもあるのです。ほんとに怖い表情になる、目がほんとうに鋭くなりますね。激して泣いたところは私は見たことはございませんが……。普通に話しているときは目尻が下がってやさしく、笑っているときは可愛らしいのですが。 [南方文枝 1981: 68]

◆ 時間

1904年3月27日 陰

II, p.262, 1.3 from below

虫の物を見るが如し。面前の処のみ見る。

過たるは過去、未来は未見なり。然し何れも実に現にあるなり。

死者現世の成行を知るは、死者の瞬間現世の人の数時に当る也。

(Myers, II, p.57) み合すべし。 [日記2: 419]

- 我々人間は通常、現在というものを、過去→現在→未来という「時間の矢」の中でのみを見ているが、実は、過去も未来も既にここにある。
- 虫は、今この瞬間に張り付き生きている。そしてこの虫の見方は、「面前の処のみ見」ているようでいて、実は、この「面前」には過去も未来も孕まれているということを熊楠は述べている。
- 熊楠は、この過去も未来も混合された「現在(まさに今この瞬間)」にこそ、圧倒的に共感していたのだと思われる。
- 熊楠にとって、過去と未来とは、区別が付きづらいものであった。
- 彼の中では、過去に知っていたことと未来に起こる出来事が混合されていた。
- 「予知 precognition」と「前知 promnesia」とがミックスされていた。
- 両者の壁は浸透性をもっていた。熊楠は、ミックスされた「現在」を生きていた。

HP vol. 2 CAPTER IX, TRANCE, POSSESSION, ECSTASY, p.262

いまだに一層歓迎されていないのは、いわゆる「未来」が実際に既に存在しているという更に進んだ考えである。つまり、見かけの時間進行は、主観的な人間の感覚であり……。

- 世間一般では、過去→現在→未来という見方が正しいとされているが、熊楠にとって、それは「不自然」でしかなく、むしろマイヤーズの言う「いわゆる『未来』が実際に既に存在しているという更に進んだ考え」の方が「当然」であった。
- 熊楠が「当然」と思っていること→世間では「異常」
- 熊楠は、自身の在り方が、社会では白い目で見られることも知っていた。
- 熊楠は、自虐的に自身のことを「夢中夢を説くの痴人[全集7: 130]」「ちと狂人らしく見ゆる故… [珍事評論]」などと言う。
- 小田晋(1933-2013、精神科医)は神秘的な傾向を持つ宗教家、作家、芸術家など霊的人間に共通して見られる類型モデルとして「夢幻様人格(オネイロイド・パーソナリティー)」という人格類型を提唱している。 [小田: 200]
- 「夢幻様人格」の特徴
 - ①生き生きとした直観像(直観像素質)
 - ②意識が変動しやすい
 - ③睡眠・覚醒のリズムの特異性(浅い眠り、徹夜が平気でこれに短い夢の多い眠りが入る)
 - ④夢と現実の相互浸透性
 - ⑤精神的な脆さ、幼さ
 - ⑥自主的な気分変動

◆ まとめ

- ・ 過去と未来、自己と他者との区別が曖昧になっていた原因を、熊楠の脳の器質的問題(側頭葉てんかん)にだけ求めることは、本発表の主意ではない。
- ・ また OBE をただの幻覚現象として片付けるつもりもない。
- ・ 確かに、熊楠によるこれらの不可思議な出来事の一因が「病」にあることは間違いない。
- ・ —しかし、それがすべてではない。
- ・ そこには、*Human Personality and Its Survival of Bodily Death* vol.1 & 2 という書物の影響、そして、那智山という聖地に漂う独特の「空気」の影響も多大にあったことを忘れてはならない。
- ・ 古来「死の世界」と限りなく近いとされてきた那智山での生活。
- ・ 日記に溢れる「死」の文字。
- ⇒ 精神的危機状況＝「精神変態」。
- ・ そもそも、なぜ我々は、この自己と他者との区別や過去→現在→未来という「時間の矢」をもつことが「正常」だと思いついでいるのかを深く考えなければならない。このような区別や矢印など消えてしまい、すべてが統一された根源的な場があるのでは。
- ・ 熊楠は、あわいに立っていた。
- ・ 自己と他者、過去と未来、この世とあの世……
- ・ ここに立つ者が「常識的な」一般社会で生きていくことは大変苦しい。
- ・ 皆が、その人を「もとの場所」へと戻そうとするから。
- ・ また、その人自身も「もとの場所」を知ってしまったから。
- ・ 「もとの場所」とは何か？
- ・ 「根源的な場(全てが一つの場)」から最も遠い、いわゆる「現実社会」？それとも「現実社会」を包みこむようにしてある、この「根源的な場(父母未生以前の場)」？
- ・ 熊楠は、この両極のあわいで苦しんでいた。しかし、一方で、この「現実世界」が全てだと考えている者には感じられないような「生命そのもの」からの力を強烈に感じていたのでは。
- ・ もし自己と他者の区別が不鮮明な場が、「生命そのもの(根源的な場)」に最も近い処であるとするならば、「異常」を有しているのは、実は我々の方。
- ・ 自己と他者の区別を徹底化し、そこに安住しようとするのは「正常」？
- ・ 「統一(根源的な場)」こそ「真」であるならば、そこから完全に離れ、さらにそこから目を背けようとするこそ「異常」なことでは。

以上

凡例

1、『南方熊楠全集』は、『全集』と略記した。

『全集』＝南方熊楠著／岩村忍・入矢義高・岡本清造監修、飯倉照平校訂、『南方熊楠全集 1～10 巻、別巻 1、2』、平凡社、1971～1975 年

2、『南方熊楠日記』は、『日記』と略記した。

『日記』＝南方熊楠著／長谷川興蔵校訂、『南方熊楠日記 1～4 巻』、八坂書房、1987～1989 年

参考文献

- ・ 小田晋、『狂気・信仰・犯罪』、弘文堂、1980 年
- ・ 唐澤太輔、『南方熊楠の見た夢—パサーージュに立つ者—』、勉誠出版、2014 年
- ・ 唐澤太輔、「南方熊楠と「テレパシー」という言葉に関する考察」、『エコフィロソフィ研究』第 9 号、東洋大学、2015 年
- ・ 唐澤太輔、「那智山における超感覚的知覚現象—南方熊楠による記述と『ヒューマン・パーソナリティー』との比較を通じて—」、『エコフィロソフィ研究』第 10 号、東洋大学、2016 年
- ・ 近藤俊文、『天才の誕生—あるいは南方熊楠の人間学—』、岩波書店、1996 年
- ・ 扇谷明「南方熊楠のてんかん：病跡学的研究」、『精神神経学雑誌』第 108 巻第 2 号、2006 年

- ・武内善信紹介、「〔資料〕土宜法龍宛南方熊楠書簡」、『和歌山市立博物館研究紀要』第 25 号、2010 年
- ・中沢新一、『芸術人類学』、みすず書房、2006 年
- ・濱中淑彦、『臨床神経精神医学：意識・知能・記憶の病理』、医学書院、1986 年
- ・Myers, Frederick William Henry, *Human Personality and Its Survival of Bodily Death* part 1 & 2, Kessinger Pub Co, 1903
- ・三浦清宏、『近代スピリチュアリズムの歴史—心霊研究から超心理学へ—』、講談社、2008 年
- ・南方熊楠、『珍事評論』、長谷川興蔵、武内善信校訂、平凡社、1995 年
- ・南方熊楠、「1904 年 6 月 21 日付土宜法龍宛書簡」、武内善信（資料紹介）『和歌山市立博物館研究紀要』第 25 号、和歌山市立博物館、2010 年
- ・南方熊楠、三田村玄龍、「南方熊楠・三田村玄龍往復書簡」（『全集』未収録）、雲藤等・原田健一編、『熊楠研究』第 6 号、南方熊楠資料研究会、2004 年
- ・南方文枝、『父南方熊楠を語る』、日本エディターズスクール出版部、1981 年
- ・Murai T, Hanakawa T, Sengoku A et al. 'Temporal lobe epilepsy in a genius of natural history: MRI volumetric study of postmortem brain'. *Neurology* ; 50: 1373-1376, 1998.
- ・Olaf Blanke, Stéphanie Ortigue, Theodor Landis, Margitta Seeck, 'Stimulating illusory own-body perceptions—The part of the brain that can induce out-of-body experiences has been located—' *Nature* September 19, 2002

※本発表は、日本学術振興会科研費若手 B「フレデリック・ヘンリー・マイヤーズの研究—南方熊楠と関連させて—」（2014.4～2016.3）で行った研究に、新たな調査・研究成果を加えたものである。